刑務所出所者の引受人・家族の会における家族に対する薬物依存症対策について

上島真理子、小泉典章（長野県精神保健福祉センター）

キーワード：刑務所出所者、引受人会、家族支援、薬物依存症、覚せい剤

要旨：刑務所出所者の引受人・家族の会における講義内容を振り返り、その目的を明確にするともに、家族へのアンケート調査の結果から薬物依存症者を持つ家族への支援について考察した。この会では、薬物依存症は病気であるという認識が必要であること、家族が依存症について学び対処していくことが本人と家族自身の回復につながること、回復には時間がかかるため、家族が信頼できる相談相手を見つけて欲しいということを伝え、家族が支援を受けられるきっかけとなるよう講義をしている。

A. 目的

長野県精神保健福祉センター（以下、当センター）では、平成23年度より長野保護観察所の依頼により刑務所出所者の引受人・家族の会（年2回）で講義を担当している。その経験を踏まえ、刑務所出所者の家族に対する支援について考察したので、報告する。

B. 方法

1. 長野保護観察所の引受人・家族の会で講義資料として用いた当センター作成の「薬物依存症支援者のための相談対応ハンドブック」、パワーポイント資料の内容を振り返り、講義の目的を明確にする。
2. 平成23年度に開催された引受人・家族の会で、事前に長野保護観察所の了解を得て、家族にアンケート調査を実施した。アンケート項目は①家族が困っていること、不安に感じていること、②家族教室の内容として希望するものについて選択肢により無記名で回答を得た。その結果から家族のニーズを知る。

C. 結果

1. 講義内容

①薬物依存症は病気であり、回復する方法があることを知ってもらう。
- 薬物依存症にどうしてなるのか
- 本人の意志の問題ではない
- 適切な関わり方や治療で回復することができる
- 慢性疾患としての認識が必要である
- 再使用する可能性がありうる

②本人の回復のために家族ができることを知ってもらう。
- 家族にはできること、できないことがある
- 本人の薬物問題を家族がコントロールすることはできない
- 本人に巻き込まれやすいので、家族は他者に相談しながら関わっていくと良い
- 本人とのコミュニケーションの取り方
- 本人との距離の取り方・関わり方

③依存症の相談・治療機関があることを知ってもらう。
- 相談機関の紹介
- 治療機関（一般の精神科／薬物依存症専門）の紹介
- 民間リハビリテーション施設（ダルク）、自助グループの紹介
- 行政機関で実施しているグループや家族教室の紹介

④家族自身の精神健康維持の必要性を知ってもらう。
- 依存症からの回復には時間がかかる
- 家族が疲弊しないよう気持ちを癒す手段を持つ
- まずは家族が断薬が続いている回復者と出会い、回復のイメージを持つことが大切である

2. アンケート調査の結果

10名の家族より回答を得た。

①困っていること、不安に感じていること（複数回答）

項目	人数
再び薬物を使用しないか心配	8
本人にどのように接していいかわからない	4
本人の健康面が心配	2
相談相手・相談場所がわからない	2
借金があり、今後の生活が心配	1
家族が辛さを話せる場所がない	0
困っていることや不安はない	0
その他	2

その他の内容としては、「仕事のこと」「共依存*をせざるを得ない」との自由記載があった。回答者が一番多かった項目は「再使用の心配」であった。

＊共依存：本人が薬物使用で起こした問題の尻拭いをし、本人がその問題の責任をとらなくてすむような周囲の対処行動。その結果、本人の薬物使用を継続させてしまう。

②家族教室の内容として希望するもの（複数回答）

項目	人数
適切な対応方法	7
薬物依存症に関する知識	6
同じ立場の家族との交流	6
回復した本人の体験談	5
支援・相談機関などの社会資源の情報	4
薬物問題に関する法律	2
借金問題への対応	2
その他	0

回答者が一番多かった項目は「適切な対応方法」、その次に「薬物依存症に関する知識」「同じ立場の家族との交流」であった。

D. 考察

引受人・家族の会に参加する家族は、薬物問題の経過や本人との関係性などの背景はそれぞれ異なり、本人に対する思いも様々であると思われる。しかし、アンケート調査の結果から、参加している家族は何らかの困り感や不安を抱え、本人のことを心配していることがわかった。特に、薬物の再使用を心配する声が多くあった。出所となれば、再び薬物の入手が可能となる環境へ戻ることになるため、その不安の表れだと考えられる。また、家族は薬物依存症に関する知識や適切な対応方法を知ることと同じくらい、同じ立場である家族との交流や長く断薬が続いている当事者の話を聞きたいという要望があることがわかった。

家族にとっては、本人の再使用を防ぐことが大きな目標となるかもしれないが、本人がどういう状況にあるのか、問題の根本を理解しておく必要がある。そこで、私たちはこの会で家族に、①薬物依存症は病気であるという認識が必要であること、②家族が依存症について学び、対処していくことが本人と家族自身の回復につながること、③回復には時間がかかるため、家族が信頼できる相談相手を見つけて欲しいこと、の3点を伝えることが大切だと考える。

①と②について、この会では限られた時間の中で一般的な知識を伝えることになるが、実際には家族や本人の状況に応じて、継続的な個別支援が求められる。また、家族が依存症の理解を深め、具体的にどう対応するかを考える上で、家族教室と自助グループや家族会などのグループへの参加が有効だと思われる。そこで、同じ立場の家族と分かち合うことで気持ちが楽になり、回復への力とすることができる。また、長く断薬が続いている当事者の体験談を聞くことで自分の家族への理解が深められ、回復した姿が家族に回復のイメージや希望を与えることができる。

③については、この会で伝えるべき最も大切なことである。信頼できる相談相手とは、自助グループなどで出会った同じ経験を持つ仲間でも、依存症の知識を持つ治療者や相談員でも良いと思われる。当センターや保健所などの行政の相談機関に相談することに抵抗を感じる家族もいるため、本人に自傷他害の恐れがない限り相談機関から通報することがないことを伝えることも必要である。そして、相談を担当する職員の顔と名前を家族に覚えてもらうことが大切である。そうすることで、家族の安心感につながり、相談への抵抗も少なくなると考える。

実際に、この会に参加していた家族から、仮出所となる前に相談があり、保護観察所とも連絡を取ったケースがあった。出所前から家族の相談を受け、支援ができることは、この会で家族と接点を持つことの大きなメリットである。また、他の家族からも出所後に再使用をしているがどうしたらいいかと相談があった。困った時だけでなく、継続的な相談ができることは理想だが、こうやって相談機関を覚えてもらえたことも、講義の意義ではなかったかと考えられる。

家族が自分たちの中だけで問題を解決しようとしても、かえって問題が大きく、複雑になることが多い。依存症という病気が、気付かない内に家族を巻き込んでしまうのである。家族は客観的に自分と本人の状況を把握してくれる第三者と相談しながら対応することが必要である。引受人・家族の会は、今後どうしていけばいいか戸惑いを感じている家族と相談機関が接点を持つことができる貴重な機会である。実際、この会をきっかけに個別相談をお受けした家族の話によると、この会が相談機関との初めての出会いになっているケースも多かった。家族が問題を抱え込まず、支援が受けられるきっかけになるよう、この機会を大切にしたい。

E. まとめ

家族支援について考察をしたが、家族への支援だけでは本人の立ち直りを支援することはできない。両者への支援が必要である。本人支援の第一歩が刑務所内での指導であり、指導体制を充実させることは大きな役割だと思われる。出所者が薬物を使用せずに安定した生活を続けられること、さらには、社会の一員として役割を持てることが最終的な目標だと考える。